

カリタス女子中学校 第四回入学試験

二〇二〇年二月三日 実施

# 国語問題

(五〇分)

\*答えはすべて解答用紙に記入すること。

\*字数の指定がある場合は、句読点や記号をふくむこととします。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

若いみなさんも一度は耳にしたことがあるかもしれませんが、日本では二〇三五年ごろまでに半分の仕事が、人工知能（AI）やロボットに取って代わられると予測されています。子どもたちの三人に二人は、今は存在しない職業に就くとも言われています。AIがさまざまな分野に進出し、産業構造の枠組みも変わってくると考えられているためです。人口減少時代を迎えた日本にとって、不足した労働力をAIが補ってくれるのはありがたいことですが、一方ではこれまで人間にしかできないと思われる仕事をあっさり奪われてしまうのも、また避けようのない未来予想図のようです。

実は私がやっている記者の仕事も、安泰ではないと言われています。米国の代表的通信社であるAP通信では、すでに企業の決算原稿の作成をほぼAIに任せています。労働力を補うという側面もありますが、AIの書いた原稿はほとんど間違いを犯さないという特長が①ドウニユウを後押ししています。

〈中略〉

このままAIが進化を続ければ、いずれ記者の仕事はすべて奪われてしまうのでしょうか。二〇三〇年にはニュース記事の九割を人工知能が書いているという恐ろしい予測もありますが、人間相手の取材は人間にしかできないのはもちろん、**A**取材で得られた材料の価値を判断し、意味を理解して原稿にする作業もまた、人間にしかできません。

〈中略〉

国内で大きな地震が起きれば、大ニュースであることは誰でも分かりますよね。政治家が汚職で逮捕されても民主主義に関わる重大な問題ですから、多くの人の関心事になります。判断基準がそれだけ明快であればよいのですが、ニュースバリエーの見極めにはさまざまな要素が絡み、②「筋縄ではいかないことも多いのです。似たようなニュースでも、三か月前と三か月後では意味が変わるかもしれませんし、場所や状況によっては価値が変動することもよくあります。ある程度常識的な「相場感」はありますが、方程式に当てはめれば答えが出るほど単純なものではありません。でも、価値判断という要素があるからこそ、ニュースに関わる仕事は魅力的で、人間が判断材料を集める取材を行う意味もあるのです。

交通事故のニュースを想像してみてください。幹線道路の交差点で、直進中の乗用車が対向車線から右折してきたトレーラーの側面に

衝突し、乗用車の運転手が亡くなる事故があったとします。あなたが読者なら、どの程度関心を持つニュースでしょうか。当事者や関係者にとっては痛ましい事故ですが、同じような交通事故は日々起きており、それほど大きなニュースにはならないと考えるのではないのでしょうか。

**B** その判断は基本的には間違っていないと思います。取材する記者も初めは同じように考えるはずですが、多くの死傷者が出ているような交通事故ならともかく、ニュースは他にもたくさんあり、新聞の全国紙なら恐らく地元の読者向けの欄に小さい記事として掲載されるニュースです。

**1**、同じ交差点で半年間に十回近く事故が起きていたとしたらどうでしょうか。信号機や標識などに何らかの原因があったり、見通しが悪かったりして、事故を誘発したのではないかと疑うのではないのでしょうか。もし、運転していたのが無免許の高校生だったら、同じように小さな扱いでもよいと思いますか。認知症の高齢者だったらどうでしょうか。

**C** 一見同じように見える事故でも、判断の要素が増えると、ニュースの扱いに影響を与えることが分かるでしょう。

実はこのニュース、実際に米国で起きた事故（トレーラーの右折、左折は逆です）で、世界的に大きく報じられました。乗用車が無免許運転だったわけでも、発生場所が事故の多発する交差点だったわけでもありません。理由はただ一つ、トレーラーに突っ込んだのが自動運転車だったのです。日差しが強い日で、前方で左折しようとした大型トレーラーの側面が白かったため、自動運転車のセンサーは対向車があると認識できなかつたとされています。ブレーキをかけずにそのまま直進し、事故は起きました。

公道実験の自動運転車が世界中で走り始めていますが、死亡事故が起きたのは初めてのことでした。今後の実用化にも大きな影響を与えかねないため、ニュースは世界を駆け巡りました。後から聞けば「そんなの大ニュースに決まっているじゃないか」と思うかもしれませんが、**2**、最初にニュースの価値を判断する時、記者は「乗用車とトレーラーの衝突事故。一人死亡」という断片情報だけしか手にしていないケースがほとんどなのです。

「トロッコ問題」という言葉を聞いたことがありますか？ あくまで仮定の話ですが、トロッコに乗って走っている時に制御がキかなくなり、そのまま進めば線路上で作業をしている五人を轢いてしまう危機に直面します。ポイントを切り替えて別路線を選ぶこともできますが、その場合も作業員一人を轢くことは避けられません。この際、「五人を助けるために、一人を轢く選択は許されるのか」というのが、その問題です。

当然、どちらも選びたくはありませんよね。シンブルに考えれば、犠牲者が少ない方が「まだまし」ということになるのかもしれませんが、不可抗力※ふかこうりょくとはいえ自分の選択で人ひとりを轢※ひいてしまうわけですから、道徳的に罪の意識に※さいなまれるのは避けられません。このように二つの判断の板挟みいたはさにあつて、道徳的にどちらが正しいか迷う状態を「道徳的ジレンマ」※（モラルジレンマ）と言います。

実は、同じ問題が自動運転車の開発でも持ち上がっています。かつてはいつ実現できるか分からない夢の乗り物と言われた自動運転車ですが、道路状況を見極めるAIの進歩や暗闇くらやみで障害物を感知するセンサー技術の向上は目覚ましく、日本自動車工業会は二〇三〇年までに人が運転に一切関与いっさいかんよしない「完全自動運転車」の普及ふきゅうを見込んでいます。専門家の間では「このままテクノロジーが進歩すれば、技術的な課題はいずれすべてクリアできるのではないか」と考えられています。高速道路の逆走や、アクセルとブレーキの踏み間違ふみまちがいによる急発進といったヒューマンエラーによる事故を「コンゼツ④できる日も遠くはなさそうです。マイカーに行き先を伝えて、あとは車の中で本を読んだり寝ねていたりすれば、目的地に到着とうちやくする時代がすぐそこまで近づいてきました。

しかし技術の進歩だけでは乗り越こえられない課題があります。それが「**D** 自動運転車のトロツコ問題」です。SF映画の世界のようにいつか車が空を走り（飛び）、道路と歩道が完全に分離ぶんりされるような未来が訪おそれるのかもしれませんが、それはまだ先の話です。道路上に自動運転車と人が混在している限り、常に予測不能な事態が生じ、必ず事故は起きます。見えない場所から急な飛び出しがあれば、人間のドライバーと同様、自動運転車も回避かいひすることはほとんどできません。

自動運転車による死傷事故が起きた時、人は「機械の判断」をどこまで許容することができでしょうか。いま開発者を悩なやませているのは次のような問題です。

自動運転車に乗っていると、目の前に歩行者が飛び出してきました。ブレーキを踏んでも間に合いません。急ハンドルを切れば回避できそうですが、ガードレールにぶつかって搭乗者とうじやうしやが大けがをするか、場合によっては死んでしまう恐れがあります。さて、AIは歩行者を助けるようにプログラムされるべきでしょうか。

### 3

搭乗者を最優先で守るように設計されるべきでしょうか。

これは、まさにモラルジレンマの問題です。人間が運転していても似たような状況に直面しゅんかんてきして、瞬間的に判断を求められることはあるでしょう。「歩行者は死んでしまう可能性が高い。自分が大けがですむなら、ガードレールにぶつかる方を選ぼう」と瞬時に回避する人がいるかもしれませんが、結果的に歩行者を轢※ひいてしまう人もいます。しかし、仮に歩行者を轢※ひいてしまった場合でも、ドライバーに対しては「そのような状況でとっさの判断を求めるのは酷こくだ」と同情的な声がかかるのではないのでしょうか。

自動運転車の場合は事情が異なります。4、緊急事態でどのように対処すべきか、事前にプログラミングすることが可能だからです。専門家は「歩行者を救いたいのはやまやまだが、搭乗者を守らない車に乗りたいユーザーはいないだろう」と指摘します。緊急時の判断基準は「E」優先、「F」優先、その上で被害を最小限にする」という原則に基づいて運用しなければ、自動運転車が普及することはなくとも予測しています。事故が起きた時に優先するのはあくまで「E」であり、その中でも「F」を最優先に考える、犠牲者が複数出そうな事故であれば被害を最小限にする方法を選ぶ、という具合です。

しかし、飛び出した方が悪いと分かっているにもかかわらず、轢かれた歩行者の側には割りきれなさが残るはず。果たして、私たちは「自動運転車は搭乗者を守るのが当然」と言いきれれるでしょうか。プログラムを作成する段階では、ありとあらゆる状況が想定されるはずですが、搭乗者の軽いけがと歩行者の命を比較した際の優先順位など、設定は一筋縄ではいきません。歩行者が五歳の子どもである場合と五十代の成人男性の場合では、社会の受け止め方も違ってくるはず。

AIは「ある人を助けるために、他の人を犠牲にすることは許されるのか」という難問に答えを出してはくれません。倫理的な判断基準をAIに委ねれば、人間の生き死にを機械に預けることにつながります。事故が起きた後で「自動運転車がそのような判断基準で動いているとは知らなかった」と嘆いても間に合いません。納得のできる基準は私たち人間が主体的に考え、決めるしかありません。

〈名古屋隆彦「質問する、問い返す——主体的に学ぶということ」(岩波ジュニア新書)より〉

## 〔語注〕

- ※ 人工知能 (AI) ……学習など、人間の頭のはたらきに近い能力をそなえたコンピューターシステム。
- ※ 決算原稿 ……収入と支出をまとめた計算が書かれた文章。
- ※ ニュースバリュー ……ニュースとしてのねうち。報道価値。
- ※ 相場感 ……商品が取引される、その時その時の値段の感覚。
- ※ 幹線道路 ……地域の主要な地点を結ぶ道路。
- ※ トレーラー ……動力を備えた車にひっぱられて進む車。

- ※ トロッコ……………土や石をのせてレールの上を運ぶ手おし車。
- ※ 不可抗力……………人の力では防げないこと。
- ※ さいなまれる……………責められる、苦しむ。
- ※ ジレンマ……………二つの物の間で、どうにもならなくなっている状態。板ばさみ。
- ※ ヒューマンエラー……………災害の原因となる人的ミスのこと。
- ※ プログラム……………コンピュータに仕事をさせる手順を、コンピュータ用の言葉で書くこと。
- ※ プログラミング……………コンピュータに仕事をさせる手順を指示すること。
- ※ 倫理……………人間の行うべき正しい道理。

問一

- ① ドウニユウ
  - ② 一筋
  - ③ キカ
  - ④ コンゼツ
- のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二

ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

- ア だから
- イ それとも
- ウ では
- エ なぜなら
- オ しかし

問三

取材で得られた材料の価値を判断し、意味を理解して原稿にする作業もまた、人間にしかできません。とありますが、なぜAIにはできないのですか。理由としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア AIはコミュニケーションが取れないため、人間に対して直接取材をすることができないから。
- イ AIは方程式に当てはめて答えを出すことは得意だが、それを原稿にする作業ができないから。
- ウ AIはミスをおかさない一方、材料の価値判断や原稿の作成ができるほどの労働力がないから。
- エ AIは常識的な「相場感」を持っているものの、AIの判断基準にはまだ不安定さがあるから。

オ AIは場所や状況、時間といった様々な要素によって変化する材料の価値判断ができないから。

#### 問四

B その判断は基本的には間違っています。とありますが、筆者は「基本的には」という言葉で何を表そうとしているのですか。説明としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア その判断は実は間違っているという含みかみを持たせている。

イ その判断が誤りではないという主張に自信を持っていない。

ウ その判断は間違っていないものの、痛ましいと思っっている。

エ その判断はAIならばもっと的確にできたと暗示している。

オ その判断は基本に忠実で、最善の判断だと賞賛している。

#### 問五

C 一見同じように見える事故でも、判断の要素が増えると、ニュースの扱いに影響を与えることが分かるでしょう。とありますが、交通事故のニュースの扱いに影響を与える「判断の要素」は何ですか。本文中で挙げられている例を四つ書きなさい。

#### 問六

D 自動運転車のトロッコ問題とありますが、本文中で「自動運転車のトロッコ問題」とはどのような問題だと述べられていますか。説明しなさい。

#### 問七

《E》、《F》にあてはまる言葉の組み合わせとして正しいものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア E 歩行者 F 搭乗者

イ E 歩行者 F AI

ウ E 人間 F 歩行者

エ E 人間 F 搭乗者

オ E AI F 歩行者

問八 本文全体を通じて、筆者が述べていることとしてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 歩行者よりも搭乗者を優先しなければ自動運転車は普及しないため、自動運転車が搭乗者の命を守るようにプログラムされることは避けられず、今後歩行者は自分の身を守るように注意すべきである。

イ 人工知能は今後人間の生活になくしてはならないものとなるほどその能力がますます成長していくと思われ、それと同時に人間と同じくらい正しい価値判断を下せるように進歩していくと考えられる。

ウ 人工知能は「自動運転車のトロッコ問題」という難問に答えは出せないため、あとで後悔しないためにも、その判断基準は自動運転車を作る側である人間が主体的に考え、決めていくしかないのである。

エ 自動運転車は「自動運転車のトロッコ問題」という難問を抱えているが、その判断は人工知能には不可能であるため、自動運転車を運転するドライバーのその場のとっさの判断に任されている。

オ 人工知能が搭載された自動運転車の発展に希望を持ちたいところだが、「自動運転車のトロッコ問題」のような場合の判断は人工知能には今後もできないため、自動運転車を実用化してはならない。



次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

中学一年生の「おれ」は、ロードバイク（自転車的一种）に乗ってレースに参加している。

その中にひときわ目立つ、ママチャリ（レース用の自転車ではない、日常生活で使う自転車）に乗った高校生がいた。

コースは残り三キロ。本格的なS字カーブが続く。

すぐ前を走る黒い背中から、ハアハアという荒い息づかいが聞こえる。ここからは意地だけだ。勝ちたいと強く思うほうの勝ちだ。

ときどき引き離されそうになりながらもなんとか後ろをついていった。高校生の抜群のライン取りを真似しながら、それでもチャンスがうかがっていた。

ゴール前の直線までもつれこめばスパートで勝てる。

今は我慢どころだ。

大きな右曲りのコーナーで、ゆっくり走る集団に追いついた。

高校生がちらりとカーブミラーをのぞいた。\* インにいく気だ。

ときどき救急車両やスタッフ車、それから、既にゴールした選手が下ってくる場合があるから、反対車線は走行禁止だ。

このママチャリも一応ルールに従ってはいるが、前に遅い集団がいる場合には、カーブミラーを確認してから反対車線に飛びこんでいくこともある。そういうときの加速は圧倒的に速い。

遅れてたまるか。

予想通り反対車線に飛び出した高校生のあとに続いた。

かなり強引にインに突っこむ。白線に近いアスファルトの段差をママチャリは軽々と通っていく。

同じラインを攻めこんだそのとき、段差にタイヤを取られ、身体が横に流れた。反射的に足首をひねった。\* クリートペダルがシューズから外れる。

ロードバイクが山際の草の上に転がった。目の前にあざやかなタンポポの黄色が飛びこんできた。

「……!!」<sup>A</sup>

次に見えたのは、澄みわたった青空。なにが起こったのか、しばらく理解できなかった。落車した……。

そう気がついて、跳ね起きた。顔を上げると、高校生の姿はなかった。当然だ。

「だいじょうぶか？」

後方の選手が声をかけながら通り過ぎていく。

「くそっ！ いいペースで走っていたのに……」

あわててロードバイクを起こしてまたがった。片足でペダルを踏もうとするが、いつもと足の感覚がちがう。血の気がサーツと引いた。

「チェーンが……」

転んだはずみでチェーンが外れていた。

「こんなときに……」

ロードバイクを降りて、チェーンを直そうとする。《 1 》、指先が思うように動いてくれない。

次々に後ろからくる選手に抜かれていく。

焦燥感に苛まれ、①額の汗をぬぐうのももどかしい。

「……!!」

そのとき、目がひとりの選手に釘づけになった。白のピナレロ……。顔を歪ませて懸命にペダルをこぐそいつと目が合った。  
※ハルヒルで負けたライバルだった。

「……」

抜かれた。また、負ける。

おれは呆然と立ち尽くした。

前を走っていたのに。今回こそはライバルに負けまいと思っていたのに。中学生でトップは無理でも、同学年の選手には勝ちたかった。オヤジと母さんに合わせる顔がなかった。ゴール地点にいる両親は、《 2 》期待をかけた息子のくるのを待っているだろう。ライバルのほうが先に姿を見せたら、どんなに落胆するか。

しかたない……。チェーンが外れたのがいけないんだ。マシーンさえちゃんと動けば、今からだってライバルをぶち抜くことができるのに。

おれだって、あいつみたいに身体に合ったピナレロに乗ってさえいれば……。うつむいた頬に汗が伝わって落ちた。

このままリタイヤしよう。結果を残せないなら、無理してチェーンを直して走る必要はない。

「どうした？ 故障か……？」

ロードバイクとはちがう乾いたタイヤの音がした。

「B  
……！」

顔を上げて、とっさに言葉が出なかった。

さっきまで夢中で追いかけていたママチャリ高校生だった。

「チェーンか？」

高校生がママチャリを路側に止め、ロードバイクをのぞきこむ。

「なにしにきたんだよ！」

おれは思わず叫んだ。C 第一こんな変なヤツと関わったから、痛い目にあつたんじゃないか。

「気づいたら追いかけてこなかったから、なにかあったのかと思ってさ。転んだのか？ だいじょうぶか？」

「……」

言われて初めて痛みが気がついた。ヒジのところから血がにじんでいる。

「なに考えているんだよ。レース中だろ？」

「だって、おもしろかったからさ」

高校生はそう言って、日に焼けた顔でにっこりと笑った。

「……?」

「おまえ、中学生だろう? スゲーよ。おれが抜かしたのに、ちぎれなかったヤツなんて……」

「……なに言ってるんだよ。だって、それ、ママチャリだろう? おれのはロードバイクなのに……」

「この道路は通学路なんだぜ。中学のときから毎日走っているんだよ。おまえらみたいなよそからきたヤツラには負けなよ。しかも、中坊ちゆうぼうにさ」

「……」

「とにかく、おれ、おまえに追いかけられてスゲーわくわくしたんだ。さっさとこれ、直して続きやろうぜ」

高校生はそう言って、しゃがみこんでチェーンにむかう。

「……」

中学生が通学のときにかぶるような白いヘルメットを見下ろしながら、D喉のどの奥おくにしよっぱいものがこみ上げてくる。

《 3 》、後続の選手が追い抜いていく。

「できた! はまったぞ!」

高校生が立ち上がって、額の汗あせをぬぐう。

「あれ……?」

ロードバイクを起こして少し前進させた高校生の顔がくもった。

「あちゃ。パンクもか……」

「もういいです」

再びロードバイクを横にして、パンクした後輪をのぞきこむ高校生におれは言った。

たかがママチャリと馬鹿ばかにしていた。

けれど、ママチャリの太いタイヤなら楽こに越えられたアスファルトの段差が、細いロードバイクのタイヤでは越えられなかった。

今回のヒルクライムのレース用に軽じゅうしさを重視したタイヤに変えた。新品のときは丸いタイヤが、<sup>②</sup>チョウセイを重ねていくうちに親指

くらいの幅で平らにすり減っていた。今回のレースには、ぎりぎり耐えられると判断していたのに。ふつうに走ってさえいれば。

こうなったのは、愛車を理解していなかった自分のうぬぼれが原因だ。

イタリア製の何十万のロードバイクじゃなくても、勝つ方法はあった。負けたのはおれ自身のせいだった。機材の性能のせいにして自分だけが情けなかった。

「先にいってください。そんなに速いのに、もったいないです」

「なんだよ。おれはおまえと続きが走りたいんだよ」

「だって、せっかくのレースが……」

「レースなんて関係ないの！ おまえと一緒に、全力で抜くか抜かれるかっていうのが楽しいんだから……」

「楽しい？」

おれは思わず聞き返した。

「おまえだって、楽しかっただろう？」

高校生が振りむいた。

自転車に乗っていて、楽しいなんて感情を持ったことがなかった。レースはいつだって真剣勝負で、勝つためのものだ。勝たなければ意味がないし、練習だってそのためにしていた。

風が吹いて足元のタンポポの③ワタゲが飛んだ。

それでも、高校生の後ろ姿を必死で追っていたとき、楽しいと思わなくもなかった。どうして速く走れるのか、知りたくてたまらなかつた。

「うん。おれも、アニキともっと一緒に走りたい」

「アニキ？」

高校生がすっとんきような声を出した。

「へへへ。よし、直すぞ！ 換えのチューブ持ってるんだらう？」

「うん」

高校生は照れくさそうに笑って、ロードバイクへむかう。

もつと速く走れるようになりたい。オヤジのためではなく、自分自身のために。そして、この人の後ろをずっと全力で追いかけてたい。強い日差しに光る通学用の白いヘルメットを見下ろしながら、心からそう思った。

〈加部鈴子『風のヒルクライム ぼくらの自転車ロードレース』(岩崎書店)より〉

### 〔語注〕

- ※ スパート……………レースなどで、ある区間急に全速力を出すこと。
- ※ イン……………「インコース」の略。カーブの内側。
- ※ クリートペダル……………シユーズを固定するための器具のついたペダル。
- ※ ピナレロ……………イタリアのメーカーのロードバイクの名。
- ※ ハルヒル……………「榛名山はるなさんヒルクライム」の通称つづなごう。「ヒルクライム」とは、山や上り坂をのぼる自転車レースのこと。「おれ」は昨年、小学生の部で参加した。
- ※ ちぎれなかった……………引き離せなかった

問一 ① 額 ② チョウセイ ③ ワタゲ の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。

問二 《 1 《 《 3 《 にあてはまる言葉として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

- ア 今か今かと      イ 抜きつ抜かれつ      ウ あわてればあわてるほど      エ 次から次に      オ 代わる代わる

問三 「……！」、「……！」は「おれ」が衝撃しょうげきを受けたことをあらわしたのですが、それぞれのようなことが衝撃だったのでしょうか。簡潔に書きなさい。

問四 C 第一こんな変なヤツと関わったから、痛い目にあっただんじじゃないか。について、次の(1)・(2)に答えなさい。

- それぞれ本文中の言葉を使って簡潔にまとめること。
- (1) 「関わった」とありますが、「おれ」は具体的にはどうしたのですか。
- (2) (1)の結果、「おれ」はどのような「痛い目」にあったのですか。

問五 D 喉の奥にしょっぱいものがこみ上げてくる。とありますが、このようになったのはなぜですか。理由として最もふさわしいものを

次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 今回こそはライバルに負けまいと挑いどんだレースにもかかわらず、マシンの調子が悪く、故障が相次ぎくやしかったから。
- イ 昨年ハルヒルで負けたライバルは、きつと今ごろもつと先を走っているだろうと思うと焦あせりをおさえられなくなったから。
- ウ 変なヤツだと思っていた高校生が思いがけず親身になってくれたことで、自分の無力さを痛感し、情けなくなったから。
- エ 夢中で背中を追いかけた高校生がレースを放り出してまで修理を手伝ってくれた姿に感極まり、あこがれをいだいたから。
- オ 自分の優勝を信じ、ゴール地点で待っていてくれる両親の姿が目まに浮うかび、申し訳ない気持ちでいっぱいになったから。

問六 次の(1)・(2)は、「おれ」が「アニキ」と出会う前と後で大きく変化しています。どのような変化があったのでしょうか。それぞれまとめなさい。

- (1) レースに負けた原因についての考え
- (2) レースに対する意識

\*\*\*\*  
\* 国語の問題はこれで終わりです。  
\* \*\*\*\*

